THE HIPHOP PRINCE

雨鱒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＴＨＥ　ＨＩＰＨＯＰ　ＰＲＩＮＣＥ

【Ｎコード】
Ｎ６８４１Ｚ

【作者名】
雨鱒

【あらすじ】
えー、マルス王子がラッパーデビュー！？　名はリル・ディンゴ。おまけにすっげぇギャングスタライムかましまくり。マルスよ、何が遭った…？

ライム１：やりたい事（前書き）

始まるＺＥ！

ライム1：やりたい事

アティリア王国の王子、マルスはここ最近何故か心が満たされなかった。
自分は王子と言う絶対的な立場な上に、各実力者が集まり互いの強さを競い合う競技［スマッシュ・ブラザーズ］にも出場し、上出来な成績を残していた。
しかし、自分の中ではそれ以外にもやりたい事があった。
いや、自分が王子である限り、それはしない方がいい。自分がやりたい、と思っている事は、ある意味では不謹慎であるからだ。
しかし、一度だけでいいからやってみたい。やってみたいのだ…。
その夜、マルスは自室で決めた。
「やろう」
と。

ライム１：やりたい事（後書き）

次話は更新するＹＯ！

ライム２：マルス、ラッパーデビュー（前書き）

マルス王子、ついにラッパーデビューだＹＯ！

ライム2：マルス、ラッパーデビュー

スマブラの本拠地であるキノコランドは近代的な国だ。
“世界のヒーロー”と言う肩書きを持つマリオと弟、ルイージはこの国の者だ。
二人は街にある大手ＣＤストア［メガ・ソング］へと足を運んでいた。
二週間後にスマブラが開催され、出場が決まっている二人は入場テーマに合うアーティストのＣＤを選びに来た。
自動ドアが開き、店員が「いらっしゃいませぇ」と出迎える。
店内には多くの客が出入りし、当店には様々なジャンルのアーティストのＣＤが売られていた。
店内のスピーカーからはポップスやハードロックが流れていた。
「あれ？」
ルイージはヘヴィメタルコーナーで見覚えのある人物を目にした。
「お、サムスじゃないか」
その人物はスマブラでも屈指の実力を誇る女性バウンティー、ゼロサムスーツサムスことサムス・アランであった。
そう言えば彼女は大のヘヴィメタル好きでもあった。
棚からお気に入りのアルバムを手にし、レジへ向かう途中、マリオとルイージと目が合い、世間話を交わす。
すると、現在話題のアーティストのＰＶを流す小型テレビの前に多くの客達が集まり、何かと騒いでいた。
三人はテレビの前に歩み寄り、彼らがキャーキャー騒いでいるアーティストのＰＶを見た。
「んん！？」
三人は目を疑った。
そのアーティストはギャンスタロークをかけ、ウッドランド柄のカーゴパンツにベレッタＭ９２Ｆハンドガンが描かれたＴシャツ姿の

マルスが映っているではないか。
「ヘイッ、ビッチ…」
自分達の知らぬ間にマルスが何とラッパーデビューをしていたのだ。
よく見ればテレビの横にはＰＶと同じを格好をし、「リル・ディンゴ／ファック・ザ・エネミー」と書かれたアルバムが何枚か置かれていた。
彼がＰＶで歌っているのは１ｓｔシングル“アカネイア・ラヴ”であった。
マルスと言えば、優しくて利口なイメージがあるが、リル・ディンゴとしてのマルスにそれらのイメージはない。
「マルスがラッパーデビューとは…」
「そう言えば、マルスって入場曲にヒップホップ使っていたわよね」
スマブラで各選手の入場曲の使用が導入されたのは、今回が初めてではなく、その際にマルスは入場曲をハウス・オブ・ペインの“ジャンプ・アラウンド”を使用していたのを覚えている。
「なぁ、あんた」
Ｂ－ＢＯＹルックスの青年にマリオは話しかけられる。
「リル・ディンゴ、最高だと思わないか。“アカネイア・ラヴ”は痺れるよな？」
「あ、ああ、そうだな…」
実はマリオ自身は、体してヒップホップは好きではなく、ロックやポップスが好みであった。
「君は彼のファンかい？」「当たり前よ、“アカネイア・ラヴ”を聞いた瞬間、ブッ飛んだよ。ウェッサイ好きは聞かなきゃなんねぇ一枚さ」
ヒップホップにはイーストコースト・ラップやサウス・ラップやウエストコースト・ラップと、種類がある。
マルスの曲はどうやらウエストコースト・ラップ系らしい。
「ふ～ん、どれどれ、試しに聞いてみるかな」
ルイージは彼のアルバムを一枚手にする。その後、二人はアルバム

探しをし、レジで会計をすますと、店内から出た。

ライム２：マルス、ラッパーデビュー（後書き）

次話にお楽しＭＩ

ライム３：ギャングスタ・プリンス（前書き）

『スーパードンキーコング』シリーズでもお馴染みの悪役集団、クレムリン軍団もラッパーでデビューだＹＯ！
おまけにキャプテンクルールはレーベルのお偉いさんＤＡ

ライム３：ギャングスタ・プリンス

既にマルスがリル・ディンゴと言う名でラッパーデビューした事は、他のスマブラメンバーにも知れており、また、彼をラッパーデビューさせたのはワリオだと知った。
「いやね、奴が俺にところに来て『ラップ活動をしたい』ってぇ言うからデビューさしたのさ」
ワリオは鼻をほじりながら言う。
そう言えばワリオはダイヤモンドシティで会社を経営する社長であり、自身の芸能プロまで持つ、言わば大金持ちであった。
「そこで俺は奴をミスター・クルールに紹介したのよ」
ミスター・クルールとはかつてドンキー達の宿敵であった、海賊団ことクレムリン軍団のボスであったキャプテンクルールの事で、現在は海賊から足を洗い、自身のヒップホップレーベル［バッド・クロコダイルズ］を設立した。
彼のレーベルに属するラッパーの多くが彼の子分であり、今では子分達を著名的なラッパーに育て上げた名プロデューサーとなった。
「クルールはマルスを紹介した当初は『こんなモヤシがラップ活動をしたいとはな～』と言っていたが、あいつのライムを聞いてデビューを承諾したって訳だ」
「まぁ、確かにマルスはラッパーって雰囲気ではなさそうだよな」
「まぁね、けど、今じゃクランチャやクリンガーをと言った大物とコラボするほどだぜ」
クランチャとクリンガーはマルス以上に大物ギャングスタ・ラッパーであり、特にクランチャの３ｓｔアルバムは「ギャングスタ・ゾーン」はキノコランドを含め、各国で大ヒットしたアルバムであった。
「ふ～ん、デビュー当初からそんな大物達をフィーチャリングするとはねぇ」

クルールが住むクレムランドもキノコランド並みに近代的で、街の雰囲気はロサンジェルスに似ていた。
また、ギャングも多く犯罪率も高かった。マルスは現在、クルールの自宅でホームステイしており、今はレーベルでレコーディングを行っていた。
「よう、キッズ（ガキ）
俺にイチャモン付けんなんていい度胸だな
俺とお前、どっちが本者のギャングスタか白黒ハッキリさせようぜ
ファッカ♪」マルスはレコーディング室内で汚いライムをかましていた。
「あいつ、中々素質があるな」
クルールはマルスにギャングスタ・ラッパーとしての素質があるのを読んだ。
「お前何ざ
本当はビビりまくっている犬の様な野郎だ
お前みたいな野郎はハッタリギャング
ハハッ、フッドではやっていけねぇよ♪」
マルスと共にフィーチャリングしているキャノンもマルス並みに汚いライムをかます。
レコーディングを終え、マルスはキャノンと共に室内から出た。
「二人共、お疲れ。中々良かったぜ」
「ありがとうございます」
歌っている時はギャングスタであるマルスであるが、それ以外では何時もの様に謙虚な姿勢であった。
「お前、中々いいよ。この調子じゃレーベルを代表するラッパーになるかもよ」
キャノンはマルスの頭をクシャクシャと撫でる。
「いや、そんなおだてないでください…」マルスは恥ずかしそうに笑う。

「おーい、ディンゴ」
クランチャがマルスの名を呼びながらこちらへ歩いて来た。
レーベルの者達はマルスがどう言う人物であるかは、知っていたが、普通に「マルス」とかラッパー名の「ディンゴ」と、読んでいた。
「あ、クランチャさん」
マルスは正真正銘の王子であるが、レーベル内では未だヒヨッ子ラッパーであり、ベテランラッパー達には敬意を持って接していた。
そんな姿勢からか、マルスはレーベル内では好かれていた。
「今日よ、ちょいと俺ん家来いよ。お前に話があるんよ」
クランチャはマルスに話がある、と言う。
「僕に話…？」
「ああ、なぁに大した事じゃねぇさ」
クルールは、
「行って来いよ。なぁにクランチャは別にお前さんを取って食う訳じゃねぇ」
マルスの背中をポンと叩いた。
「んじゃ、決まりだな」
マルスはクランチャと共にレーベルを出た。

ライム３：ギャングスタ・プリンス（後書き）

クランチャがマルスを自宅へ連れて行った理由とは何か？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6841z/

THE HIPHOP PRINCE

2011年12月23日02時53分発行